
仮面ライダーヴァロー ~ ~ ~ the magician rider ~ ~ ~

カイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーヴァロア ~~~~~ the magician rider
der~~~~

【Nコード】

N5051Y

【作者名】

カイル

【あらすじ】

科学の世界で復活を遂げた魔族たち……そんな魔族を狩り、人々を陰から救う一人の戦士がいた。その戦士は科学の世に生を受け、魔術を極めた最高位の魔術師「全能なる魔術師」として生きている。そんな彼が織り成すのはどのオリジナルライダーからも当てはまることのない……新たな仮面ライダー……。

語り部（前書き）

ぶっちゃけお前も執筆やめろ？・・・その通りですね、ごめんなさい。でも書きたいんだよ！！（オイ）

実は作品を読んでもらった知人から「お前の完全オリジナルは書かないの？」と言われたので僕のオリジナル仮面ライダーを書くことにしました。ぜひご覧ください。

巷ではTPPの二次禁止の話がもちきりですが、僕は二次執筆をやる気はありません。まあ、なるようですね。禁止になったら暴れるだけです（笑）

語り部

【魔法】

人間わざとは思えない、不思議なことを行つ術。魔術。妖術。

大辞林 第二版 (三省堂) より抜粋。

魔法とは一般的にこういう意味合いを含んでいる。そして何より人々のほとんどが架空のものと認識しているのだ。15世紀から18世紀にかけてヨーロッパでは4万人が魔女狩りでその命を失った。なぜ彼らは殺されねばならなかったのか？諸説あるがやはり人々は魔法というものに対して憧れを抱くとともに強い恐れを抱いていたのではないのか？だから本当に魔法を使うことができた彼らを恐れたのではないだろうか？では、もし反対なら？・・・つまりは、魔法が現在の科学のように扱われて化学が幻想扱いになったら？きつと立場は逆転するだろう。・・・これから語られていく仮面ライダーは科学が進歩した私たちと同じような世界・・・そこで陰ながらも発展してきた魔術師が変身する・・・魔法使いライダーなのです。

語り部（後書き）

では、近々1話を投稿します。タグについてるとおり、この作品は Fateシリーズのキャラも登場させるつもりです。では！！

Magician the Magician rider (前書き)

というわけで完全オリジナルライダーの第1話です!!

Magician the Magician rider

・・・某県「天野環市」午前0時43分・・・

夜の街・・・それは数多くの光に照らされている幻想的な街・・・
。しかし・・・

「~~~~ツツツツツ!!!」

それは同時に？彼ら？のテリトリータイムでもある。

。「さて、手こずらせてくれたが・・・その分美味でしたね・・・」

？魔族？。一般的に空想上の怪物として知れ渡っている存在。だがそれらは幻想ではなく現実であり彼らによる？不可能犯罪？は確実に起こっているのだ。・・・そして、当然それを食い止める者もいる。

「・・・・・・・・・・」

「ん？・・・・・・・・つ！？貴様は・・・・・・・・」

その者は、赤く輝く複眼をもち・・・スマートな見た目と裏腹に力強い姿をしており・・・マフラーを風になびかせる。決して折れぬ意志を形作るかのように2つの大きな角は見るものを威圧する。腰に巻くベルトのバックル中央には怪しく光る結晶に六芒星が輝いていた。

「ええい……よもや見つかるとは……!!」

「……………」

「死ねい!!」

魔族とみられる異形はそのままその戦士に向かっていく。対して戦士は一步も動こうとはしない。

「……………」

ただ、相手に手をかざし……次の瞬間……

「あ……………」

魔族は燃え盛る業火に焼かれ、その身を滅ぼした。

「……………」

戦士はそんな光景に目もくれず、犠牲になってしまった男性に近寄り散乱した荷物を見る。

「……………あ」

戦士は初めて言葉を漏らす。そこにあつたのは採用通知とうちかけのメールが写る携帯電話。その文面からは両親に対しての謝罪と採用をもらったことの報告。そして、病床の母に対しての感謝と心配の内容が読み取れた。……彼の、思い描いた未来は儚くも……
……魔族の無情な行いで絶たれてしまったのだ。……戦士は静かに男性の目を閉じさせてやり、手を組ませ、荷物を傍らに備え

てやった。

「……………せめて、天上や来世では幸せになることを祈っています。」

戦士は静かに黙とうをささげ……………バイクに乗ってその場を去って行った。

……翌日、天野環市「晃峰駅」午前7時21分……

?間もなく、1番線に到着しますのは7時24分発、「御梅」行きです。この列車は、「佐間火」「櫛杵」「和星」「古枅」「澄立高校前」「御梅」の順に止まります? ?

「ふああ……………」

一人の青年があくびをしながら音楽を聴いている……………曲が終わったのか、イヤホンを外す。すると大人の話し声が聞こえてきた。

「聞きましたか昨晚の……………」

「ええ……………また起こったようですね……………不可能犯罪。」

「今回は首を人間とは思えない力でへし折られたようですね……………」

「怖いですね……………」

青年はそれを心苦しそうな顔で見つめる。

「……………」

？間もなく、1番線に御梅行きが参ります。白線の内側までお下が
りください。？

しかし、電車はいつも通りに到着しいつも通りの日常が始まる。

……???

「……………」

「ご主人、どうなされましたか？」

「いや、今夜もまた荒れそうな予感がするんだよ。……違うか。
確実に荒れる。」

……澄立高校 午前8時13分……

「おはよう。」

「あ、おはよー。菅風くん、今日は日直だからね。」

「げ……忘れてたわ。」

先ほどの青年……「菅風春樹」はイヤホンを外しながら顔をし
かめた。

「春樹、お前も大変だな。聞いたぜ？一昨日の土曜日、不良三人
をとっ捕まえたらしいじゃん!!」

「仕方がねえだろ？アッチは相当頭にきてて話が通じないんだからな。」

春樹はカバンを自分の席におくと黒板消しをもちクリーナーできれいにし始める。

「はあ、寝不足だ……。」

あくびをしながらも日直の仕事をテキパキと進める春樹。そんな彼はこの高校の2年生。……そして

……???

「キヒヒヒヒヒ……。」

「ゲゲゲッゲゲゲゲ……!!」

「さあ、……今宵の狩りは誰が行く……?」

……澄立高校 午後4時20分……

「さつてと……。」

授業が終了し、みな席を立つ。

「おおーい、管風!!」

「管風君。帰りみんなでゲームセンター寄って行かない?」

そして春樹の親友、「松下颯太」と「千歳沙織」が春樹を遊びに誘

った。だが春樹は誘いを断り急いで学校を出ようとする。

「悪い、パス。」

「なんだよ・・・最近付き合いが悪いぞ？」

「いや、最近習い事を始めたんだよ。」

「習い事？」

「うん、だから急がないと!！」

結局、沙織と颯太はゲームセンター行きをあきらめマクドナルドで軽食を取って帰ることにした。春樹は急いで駅に駆け込むと電車に飛び乗った。・・・もうすぐ夜が来る。

・・・天野環市 地下商店街 午後6時57分・・・

「・・・うん、今日は友達と食べて帰るから・・・じゃあ・・・」

「終わった？」

「おう、母さんと父さんは久々に二人外食するとよ。そっちは？」

「二人とも仕事で遅くなるから・・・」

沙織と颯太は地下商店街を通り、マクドナルドへ行こうとする。・・・が、途中に沙織が鞆についているリングキーホルダーを落としてしまった。

「あ……………」

「おっと……………」

当然二人はそれを追いかける。だが、円状なものだけあってどんどん先に転がって行ってしまふ。そしてリングは路地裏に入ってしまった。

「さつさととつて、飯いごうー!!」

「うん。」

二人はそのまま路地裏に入る。幸い、リングは奥にあつた角材にぶつかり止まっていた。沙織はそれを拾い上げ鞆に付け直す。

「よかつた。」

「じゃあ、飯に……………」

そういつて颯太は突如口ごもる。沙織は何かと思い、振り向き颯太の視線を追う。そこには……………」

「キヒ……………キヒヒヒヒ……………!!」

……………伝承にある、デーモンと呼ばれる怪物が立っていた。

「ツツツ!!」

「な……………何……………?」

二人は突如現れた怪物に驚き、戸惑い、そして……恐怖を隠せない。

「キヒヒヒヒ……！！今日の獲物決定……！！キャッハー——！！！」

デーモンは颯太たちに一気に詰め寄り、そのままその剛腕を振り下ろす……

「暗闇に灯り、人々に道を示せ……『猛火の灯り（ファイアランプ）』！！！」

……せなかつた。その剛腕に突然、赤い火が灯り燃やし始めたのだ。

「大丈夫ですか……！！？」

「春樹（君）！？！」

「なんで……」

自分が助けた人物がまさか友人の二人とは思わなかったのだろう。

春樹は驚きで固まってしまった。それは普通の反応だが……戦闘中では致命的な反応だった。

「この……ガキが！！！」

「しまっ……がふ！？！」

春樹は背後からデーモンの拳をまともに喰らい吹っ飛ばされる。その際、壁に衝突し春樹は衝撃のあまり吐血。そのまま地面にたたきつけられた。

「ゴフツ……………はあ……………はあ……………」

「おい、春樹!!」

「大丈夫!？」

「あつぶねえ……………防具つけてなかったら今頃は骨が砕けたか……………お陀仏だわ。」

春樹はそう言いながら自身が身にまとっていた金属製の防具を外す。その防具は拳のあたった部位から砕けており、もはや防具としては機能しないただの鉄塊に成り果てていた。

「……………お前、もしや……………ヴァローか!？」

「……………ヴァロー?」

「……………」

デーモンは春樹を指さし叫ぶ。颯太と沙織は頭に疑問符が浮かび、春樹は無言でデーモンを見つめる。

「……………」

春樹は無言を貫いたまま懐に手を当てる。そして何かを取り出そうとする。

「こっとなつたら……」

「待て、春樹!!」

しかし春樹が行動を起こすよりも早く若い男性の声がそれを制止した。

「セ、先生!？」

そこにいたのは……20前半の青年。そして青年は……
昨晚の戦士と同様のベルトを巻いていた。

「……」

「お、お前が!？では、このガキは……!？」

「ああ、春樹は俺の弟子だ。」

「バカな……貴様のような若造が……グランド・オブ・
マジシャンだと!？」

「あのな、人は見かけで判断するもんじゃないぞ?」

青年はそのまま普段通りのような姿勢を崩さずに……眼光だ
けは、まるで獲物を見つけた猛禽類のような鋭さを放つ。

「……では、デーモンよ。改めて名を名乗ろうか……俺
は暁洗介。そして……」

青年……洗介はベルト左側にあるホルダーからあるものを取り出す。それは……

「タロット……カード？」

沙織が言ったとおりそれはタロットカード。そしてその1枚は22枚の大アルカナのうち一枚……？0、愚者 Fool のカード。

「……」

洗介がそのカードを1回転させる。と……カードは次の瞬間に、シャープなひし形の結晶に変化する。

「……変身！！」

洗介は右手の結晶をベルトの上部から六芒星の結晶へ近づけ、左手は顔にかざす。そして結晶が六芒星に吸い込まれ……六芒星の頂点と中央、最下点までの部位に同化し現れる。洗介は左手でバツクル上部を勢いよくかすめ、右手をデーモンにかざす。左手がかかるのと同時に中央の六芒星が時計方向に一回点。その次の瞬間、洗介の足もとと上空に同様の六芒星が書かれた魔方陣が出現。2つの魔方陣は洗介を挟みこむように移動しベルトの部位で重なり消滅……消滅までの間、魔方陣の通った洗介の体は徐々に変貌を遂げる。……昨晚、魔族を狩ったあの戦士の姿に。

「仮面ライダー……ヴァローだ。」

}}to be

continue for the next magic}}

）

M a g i c i t h e M a g i c i a n r i d e r (後書き)

感想や疑問など、まっています。

magic2 daemon vs valor (前書き)

というわけで、ヴァロー初戦闘の回!!

OPテーマ J an n e D a A r c / f e e l t h e
w i n d

以下、キャスト

暁洸介 宮野真守

菅風春樹 山口勝平

松下颯太 中井和哉

千歳沙織 ゆかな

magic 2 daemon vs valor

「仮面ライダー……!? 都市伝説じゃなかったのか……!!」

ここ、天野環市では2年前から一つの都市伝説が存在している。それが……。仮面ライダー。仮面をかぶり、素顔を隠して夜の街を駆け巡るライダー……。それがこのヴァローだ。そしてヴァローは太古より伝わる強大な魔力が封じ込められたタロット……。パリメヴァルタロットを力の源とする。その内、?21?枚の大アルカナの中に存在するフォームタロットを使用しヴァローは様々な姿を取る。この姿は魔力、身体、知性、武術すべてにバランスが取れた基本形態、白と黒に彩られた姿、フォーム・オブ・フルである。

「さてつと……。春樹! ここらで人目に触れずに戦えそうな場所はどこだ?」

「えつと……。この路地の先から廃工場に出れます!!」

春樹が指差す先は……。颯太や沙織のいる方向。つまりはデーモンから現在唯一逃げられる方向である。

「マズイな……。春樹、その二人を急いで廃工場のほうに逃がせ!! その間は俺が押さえておく。」

「はい!!! 二人ともごめん!!! でも今事情話してる暇もないんだ!!! 急いでこの先に!!!」

「わつと・・・!?!」

「きゃ・・・!?!」

ヴァローの言葉とともに裏路地の奥に進み始める3人。

「逃がすか・・・!?!」

「おつと、お前さんの相手は俺だぜ？」

ヴァローは静かにマフラーをなびかせながら・・・少ない飾り気ながらも、刀身から白銀の輝きを放つ魔法剣ティンヴァーレをデ―モンに向ける。

「あいにくと俺は人の気持ちを踏みにじるような奴には・・・容赦はしない!!」

「ほざけ若造が!!」

デーモンの剛腕がヴァロー目掛けて振り下ろされる。が、ヴァローは落ち着き払い・・・

「・・・『送血の零度』。」

「が・・・ぐわあああああああああああああああああああああ
あ!?!」

魔術を無詠唱で発動。その剛腕を凍らせた後・・・

「まさか・・・やめろ・・・やめろお!!」

「『雷電の遠吠え』!!」

雷をティンヴァーレの刀身に纏わせ、凍らせたデーモンの左腕を切り砕く。……砕かれた腕のカケラはその雷が原子レベルで消滅させていく。

「腕があ……腕があああああああああ!!!!!!」
「!」

「言つたる……容赦しないつてな……!!」

すでにそこにいるのはやさしき魔術師『暁洗介』ではなく……人々の守護者にして慈悲なき狩り人『仮面ライダーヴァロー』であった。

……裏路地奥 中間地点……

?腕があ……腕があああああああ!!!!!!!!
!?

「……えげつないことしてるなあ……先生……。」

「なあ、お前の習い事って……。」

「……うん。あとで説明する。」

春樹は颯太のほうを向くことはせず、ただひたすらに走り続ける。

「……この上……二人とも、俺に掴まって!!」

「おう。」

「ごめん……」

颯太に沙織は春樹にしがみつく。それを確認した春樹は意識を集中し始める。

「……迷い、困難を迎えるであろう心を祝福し……導きたまえ……『精霊の息吹』。」

術の詠唱が終つたと同時に春樹たちの周りには一筋の旋風が巻き起こり始める。

「さあ……飛べ!!」

そして春樹がその旋風に命令を送る。次の瞬間、風は彼ら3人を勢いよく上に上にと持ち上げていく。

「うおおおお!!」

「凄い……!!」

「これ、本当は防御用なんだけどね……」

春樹は苦笑いを浮かべながら遠くに見えたヴァローに向かって大声で自分たちの現状を知らせる。

「せんせー……い!!!俺たちは今上に行ってます!!!」

クル上部を軽くこすり六芒星を移動させる。すでに埋まっている上
下の部位以外の場所、右上にソードを、左上にワンドを装填し変身
時と同じように勢いよくこすり1回転させる。

? s w o r d r e i n f o r c e m e n t ?

? w a n d r e i n f o r c e m e n t ?

「さて………行くぜ!!!」

そう言い終わらないうちにヴァローはデーモンに向かって疾走。そ
のまま勢いのままにデーモンを蹴り飛ばす。

「ぐおおおおお!?!」

「まだまだ!?!」

さらに徒手空拳、キックアタック、ティンヴァーレの斬撃などでデ
ーモンをどんどん奥に押し込んでいく。

「ガフツ!?!グオオオオオオオオオオ!?!があああああああ
ああああ!?!」

そして、ヴァローはティンヴァーレを消滅させ空いた両手でデーモ
ンを投げ飛ばす。

「せいっ、はあああああああああ!?!」

ヴァローは自身よりも一回り大きいデーモンをあっさりと投げ飛ば
した。……ヴァローの使う小アルカナはそれぞれが「能力強化」

の力を宿している。大アルカナは「変身」「投影」の二つを宿す。小アルカナのうち「ソード」は武器、武術の強化、「ワンド」は身体、体術の強化を行うことができる。そのため体躯の差で不利なヴァローがあっさりとそれを覆し有利になったのだ。しかし、一見万能に見えるこの能力にも欠点がある。それは、フォームによって使える小アルカナの種類、ランクが決まっているのだ。さらに乱用は使用者に絶大なリバウンドを返してしまう。それがいくら体を鍛え、グランド・オブ・マジシャンとなった洗介でも。フォーム・オブ・フルではランク6までの小アルカナを全種類使うことができる。さらに武、魔、体、知、四つ全てにおいてバランスが取れた安定形態。ゆえに洗介は基本のスターティングフォームをこのフォームにしている。なお、小アルカナ使用中はワンドの場合、攻撃時に攻撃を行う箇所・・・拳や足などがオーラに包まれる。ソードの場合はそれが使用中の武具になる。

「さてつと・・・ほらよ!!」

「ガハア・・・」

そして終着点・・・すなわち廃工場への入り口がある個所に到着するとヴァローは容赦なくデーモンの腹を蹴飛ばし上空に上げる。

「はあ、せい、おりゃあ!!」

さらに空中で自身も壁をけりりデーモンをけりさらに壁をけり・・・と、三角とびを応用したような攻撃で廃工場へと向かっていった。

・・・廃工場・・・

「大地の恵みに祈りを捧げ、苦しむ幼子に母の加護を・・・」聖

母の抱き』。」

春樹は地面に割れたガラスを使って魔法陣を描き、その中央に二人を呼び寄せると詠唱を開始。終了と同時に魔法陣は魔力結界に覆われた。

「これで先生も心置きなく戦えるかな？」

春樹がそう言い終わると同時に・・・デーモンが飛んできた。

「ひっ!?!」

「あらららら・・・先生、相変わらず外道相手には容赦しないなあ・・・。」

さらに遅れてヴァローも現れる。

「やっぱり、周りを気にして戦うのは結構しんどいな。」

肩を回しながらヴァローは魔力結界を見て仮面の下で笑顔を浮かべる。

「また上手くなったな春樹。二週間前より、結界の精度や耐久性が上がってる。やっぱり、才能あるな。」

・・・廃工場・・・

「大地の恵みに祈りを捧げ、苦しむ幼子に母の加護を・・・」
母の抱き』。」

春樹は地面に割れたガラスを使って魔法陣を描き、その中央に沙織と颯太を連れてくる。その後、詠唱を終えると魔方陣は魔力結界に包まれた。

「すげえ……」

「といつても簡単な方のやつだけどね……」

そんな会話をしていると……デーモンが勢いよく蹴り飛ばされてきた。

「おおっ!?!」

「キヤ!?!」

「先生、やってるなあ……」

驚く颯太と沙織だったが、春樹はもう慣れたといわんばかりに落ち着いている。

「ほっ!?!」

そしてデーモンが地面に叩きつけられると同時にヴァローも降り立った。

「お、春樹また腕上げてるじゃねえか。精度も耐久も1週間前以上だぜ?」

「はい、あれから何度も練習しましたから……でも、先生。ここに来るまでもう十分なほどに痛めつけちゃってますけど……」

「・

「と言つてもな、やっぱり周りのことを考えるとやり辛いんだよな。まあ、ここで一気に決める!!」

ヴァローはそう告げると右手でバックル上部を右方向にこすりあげた。六芒星は反時計回りで徐々に加速し、次第にまばゆい光を放ち始める。それと同時にヴァローの赤い複眼も光り輝く。ヴァローは軽くて首をスナップさせると静かに助走をつける。

? Exceed the limit?

「・・・ライダー、キック!!」

ヴァローは一定の距離にまで近づくとそこで左足で地面を思い切り跳躍。そのまま右足を突出しフォーム・オブ・フルの必殺技、「ライダーキック」をデーモンに放つ。

「はああああああ!!!!」

「ごおおおおおおおおお!!?」

デーモンはキックが当たった個所を見つめながら絶叫。そこに刻まれた六芒星は次第に体中に光の筋を広げていき・・・

「が!?!」

デーモンは大爆発を起こし、闇の粒子となり消えていった。

}}}} to be

c
o
n
t
i
n
u
e

f
o
r

t
h
e

n
e
x
t

m
a
g
i
c
~
~
~

magic2 daemon vs valor (後書き)

感想待ってます。以下、用語です。

ヴァロードライバー

ヴァローに変身するために必要なベルト。中央のマジユヴァックルには「賢者の石」と呼ばれる高純度魔法鉱石が埋め込まれている。特殊な六芒星の魔方陣が描かれておりその能力で物理的には不可能なタロットクリスタルやタロットピースを受け入れ、同化することが可能となっている。誰がいつ、どのようにして、何のために作ったのかは不明。

ティンヴァーレ

ヴァローが使用する魔法剣。すべてが謎に包まれておりこの姿すらも偽りの姿らしい。未変身時でも使用可能。

魔法解説

猛火の灯り(ファイアランプ)

炎の低級魔法。威力はあくまで威嚇程度しかない。基本的には洞窟などの薄暗い場所を灯す補助魔法の一種。

送血の零度

氷の中級魔法。威力はそこそこ。術者の指定した範囲を氷結させる。雷電の遠吠えとは相乗効果で凍らせた物体を原子レベルで崩壊させられる。

雷電の遠吠え

雷の中級魔法。威力はそこそこ。術者の指定した個所に雷を放出する。応用で剣の刀身に纏わせるなども可能。送血の零度とは相乗効果。

精霊の息吹

風の初級魔法。防御用の魔法。応用を聞かせればある程度の浮遊が可能だが自由飛行を行うまでは不可能。

聖母の抱き

初級結界魔法。魔方陣を書くことで発動するが慣れれば魔方陣なしでも発動することができる。結界魔法は基本的に難関魔法の部類に入る。

magic3 Which your choice? (前書き)

OPテーマ Janne Darc / feel the
wind

EDテーマ Janne Darc / 風にのって

キャスト

暁洗介 宮野真守

菅風春樹 山口勝平

松下颯太 中井和哉

千歳沙織 ゆかな

アマルガム 神谷明

M a g i c 3 W h i c h y o u r c h o i c e ?

…天野環市 暁邸宅 午後7時47分…

「さて、ようこそ俺の家に。」

「俺の家って…」

「大きいですねこの家!？」

「家より屋敷だねもう。ははは…」

あの戦いの後、二人を返そうとした洗介と春樹だったが颯太に「お前、知ってることはなさいと絶交だ!」と叫ばれ沙織は「おなかすいた……」と力なくへたれこんでしまったので仕方なく洗介の家に（洗介が料金を払い）タクシーで暁邸に夕食、説明もかねて招待することになった。が、二人の思っていたよりも洗介宅は豪邸だったのだ。…暁邸は2階建て+地下室の豪邸で、1階には中央に階段があるエントランス、明るいシャンデリアが輝くダイニングキッチン、暖炉、大型エアコン、壁取り付けの大型液晶テレビ、ふかふかのソファに囲まれるコーヒーテーブルが存在するリビング、多くの書籍や資料が貯蔵される書斎、大浴場、彼の爺やがいる部屋が存在する。2階には洗也の部屋に彼の妹の部屋、娯楽室にいくつかの空き部屋がある。それぞれの自室にはシャワールームにトイレ完備で部屋の内装、器具共に上質だ。娯楽室も生半可なものではなく完璧な状態でそろっている。地下には特訓場に工房が供えられてありまさに豪邸だった。

「おおーい、爺や? 優海? いないのか?」

エントランスで靴を脱いだ後、洗介は大声で爺やと妹を呼ぶ。すると、奥のリビングの扉が開き…黒髪にちよび髭の…およそ爺やとは言えない男性が執事服で現れた。

「坊ちゃん、いささかその呼び方は心外ですな。私はまだ143の若輩者ですよ?」

「人間なら十分爺やって年齢さアマルガム。」

「こんばんわアマルガムさん。今日は大勢ですいません。」

「…おや、今夜はこれまた大勢ですが?」

「ああ。悪いけどアマルガム、この子たちに食事を用意してくれないか?俺と春樹は軽めでいい。うんと腕を振るってくれないか?俺も手伝うし。」

洗介は近くにおいてある上着掛けに羽織っていた上着をかけるとアマルガムとともに厨房のほうへと消えていく。その際、春樹に「二人をダイニングに通しておけ。」と指示を出しながら。

「じゃあ、上がって。」

「…なあ、春樹?あのおっさん、143とか言ってたけど……」

「そりゃそうだよ、アマルガムさんは人間じゃないし。」

「「は!?!?」「」

あっさりとなんかことをカミングアウトした春樹に沙織と颯太はあいた口がふさがらなかった。

… 暁邸 ダイニング 午後8時08分…

「おまたせ。」

「お口に合うといいんですが…」

20分後に洗介が持ってきたのはサーロインステーキ。しかも見るからに高級な。アマルガムは程よく焼けたパンに新鮮な野菜サラダを持ってきた。

「御飲み物は何がよろしいでしょうか？」

「あ、水で結構です。」

「お、おれも水で…」

「かしこまりました。」

アマルガムは二人の目の前に食事を置くとグラスに水を注いで改めて持ってきた。

「さて、俺は紅茶。レモンティーを頼む。」

「僕はホットミルクで。さすがに10月の夜は寒いですから。」

「はい。承りました。」

アマルガムが紅茶とミルクを用意する間に洗介はパンを一つ手に取り口に運ぶ。ふと、横に目をやるとあまり食が進んでいない沙織と遠慮がちにサラダばかり食べる颯太を見た。春樹はそんな二人を見て苦笑いを浮かべながら自分はパンをほうばっていた。

「どうしたの？口に合わなかった？」

「あ、いえ！！おいしいんですけど……」

「なんだか…悪い気がして……」

そんな発言を聞いた洗介は……大笑い。

「あはははははははは！！気にしなくてもいいのに！！」

「坊ちゃん、食事時ですよ？」

そんな洗介をアマルガムは困った顔で見る。そしてミルクと紅茶を置いた後、自身は部屋へと引き上げていった。

「さて、食事中だけど…食べ終わったらリビングに来てくれないかな？春樹、案内頼む。俺は書斎から説明に使う本や資料を取ってくる。」

「ハイ、先生。」

洗介はレモンティーを手早く飲むとそのまま書斎の方向へと歩いて行った。

「やっぱうめえなこの肉。」

「うん、すつごくおいしい。」

「そりゃ国産だからね。」

颯太と沙織、ほぼ同時にフォークが落ちた。

「だって先生、すつごく大富豪だから。…本気出したら日本の経済がめっちゃクチャになるほどね。」

「マジで何者だあの人!？」

颯太の叫びはこの屋敷中にこだましていく。

「それも説明するよ。それより早く食べないと肉覚めるよ?」

その言葉を聞いた二人は急いで食事を終わらせた。マナーなんて微塵も考えずに。

… 暁邸 リビング 午後8時34分…

現在リビングにいるのは洗介、春樹、颯太、沙織の四名。それぞれソファに腰かけ沈黙している。その均衡を破ったのは、この家の家主である洗介だ。

「まず、このこれを見てくれ。」

洗介は一冊の本のあるページを開く。そこに描かれていたのは憤怒のような表情の顔に見るものを恐怖に陥れる巨大な剛腕、そして鋼色の肌。

「これってさっきの?!」

「デーモン…悪魔……」

それはファンタジーで見るとようなモンスター。日本で言うと、鬼。

「君たちは実際にあれを見たから信じてくれるだろうね。…ファンタジーの怪物、妖怪や霊といったものは絵空事じゃない。実在する。」

「…!!」

それはいくら頭の中で分かっていたとしても受け入れがたい真実。浩介もそれを承知の上で話していく。

「受け入れがたいけど、これは事実なんだ。そして…魔法も実在する。僕も春樹も、魔術師なんだ。」

「じゃあ、春樹君が使ったあの風や炎は魔法？」

「うん。まあ、まだまだ未熟だけど。俺は1年前に魔族に襲われた時、先生が変身するヴァローに助けられたんだ。その時に弟子入りさせてもらって。」

春樹は照れながら話す。浩介は春樹の頭をこつくと続きを話し始める。

「いた?!」

「調子に乗るなって。慢心は探究心を薄めるぞ？…っと、続きだな。俺たち魔術師…つってもその中の俺と、俺の仲間たち…総勢47人の魔術師が世界中で魔族との戦いを仕事としている。」

洸介は指を鳴らしアマルガムを呼ぶ。アマルガムは世界地図を持つてくる。

「魔族は世界7か国に存在するワームホールを通って出てくる。だから、ワームホールの存在する国に仲間たちが住み、魔族たちと戦っている。アメリカ、イギリス、ロシア、エジプト、ブラジル、中国そして…日本。」

洸介が国名を言うにつれて、アマルガムの持つ世界地図の国が光っていく。

「アメリカ、ニューヨークに9人。イギリス、ベルファストに8人。ロシア、モスクワに10人。エジプト、ギザに6人。ブラジル、ブラジリアに5人。中国、香港に7人。そして日本には俺と春樹の2人。世界各国でみんな魔族と戦っている。」

「何か日本は少ないですね。」

「颯太、洸介さんは…」

沙織は颯太に向けて呆れた表情を見せる。颯太は一瞬だけ頭にはてなを浮かべたがすぐにそのはてなは消える事と成った。

「そっか！洸介さんは仮面ライダーだ！！」

「そ。日本が極端に人手が少ない理由は俺がヴァローということだ

からだ。まあ、ヴァローの力は強大だからなあ。さてと……ここまで君たちに話してんだけど、ここである選択をしてもらいたい。」

「選択……ですか？」

「ああ……かなり極端な選択になってしまっけど、一つ目はここで話なんか心の奥底に封じ込めて、今まで通りの生活を送る。もう一つは……」

洸介は思わせぶりに息を吸い込みながら二つ目の選択肢を提示した。

「……魔術師としての道を踏み出し、魔族たちとの戦いの日々に足を踏み入れるかだ。」

「……………!!」

「でしょうね。あなたの話を聞いていたらそんな気はしました。…

私の答えは後者ですよ。颯太君は？」

「おまつ！？千歳はなんでそんなに落ち着いて決められんだよ！？春樹が目の前であんな目にあって！死ぬかもしれねえってのによ！」

沙織は驚くほど冷静に答えを出した。一方の颯太は誰の目から見ても慌てた様子だった。彼の心にあるのは……恐怖。

「颯太……」

「颯太君。君の気持ちもよくわかる。沙織ちゃんのようにあっさりと答えを出す必要はないんだ。……ちょうど明日は休日だ。一晩ゆ

つくり考えて答えを教えてください。それで俺は構わ………
!?!」

『構わない』と、言いかけた時に屋敷内が不思議な音色で包まれていく。

「ウソだろ……!?!先生、あり得ませんよこんなこと!?!」

「……俺の仮説通りみたいだなこれは。アマルガム、二人を頼む。行くぞ春樹!?!」

「ハイ!?!」

洸介と春樹はそのまま駆け出し、部屋を飛び出していく。

「アマルガムさん、これは?」

「ワームホールから魔族が出現した警告音です。本来なら、連続して出られないように結界がはってあるのですが……。どうやらこの件を皆様方に報告しなければ……。」

沙織とアマルガムはリビングで静かに話し込む。……が、ここで颯太がいないことに気付く。

「っ、颯太!?!颯太がいない!?!」

「何ですって!?!」

二人は大慌てで立ち上がる。が、颯太は影も形も残さずに部屋から忽然と消えていた。

「まさかとは思いつけど…こんな時に帰ったとかやめてよね…」

…天野環市 中央市街地 午後9時27分…

洸介と春樹はヴァローこと洸介専用バイク、マシンマジッカーに二人乗りで強い魔力を感じる方向に走らせていた。

「先生、車で来た方がよかつたんじゃない…」

「ああ、あれ？今現在修理中！！」

お互いに会話を挟みながらもマジッカーのスピードを上げ、現場へと急いでいた。

「…もう少しだな。春樹、戦闘準備。やれるな？」

「はい。」

そして彼らは夜の静寂が漂う波止場に到着した。

「海…か。嫌な予感しかしねえよ。」

洸介はヴァロードライバーを装着。懐からパリメヴァルタロットが入ったカードホルダーを取り出し左腰の部分に装着する。

「先生。念のために周りには人払いの結界を張ります。」

「ああ……。」

洗介は愚者^{フル}のカードをクリスタルに変化させいつでも変身できるようにする。だが次の瞬間、

「おわっ!?!」

海から伸ばされた触手に足を取られた洗介がそのまま海に引きずり込まれた。

「先生!?!」

結界の魔方陣を書いている途中だった春樹は突然のことに対応できず、ただ洗介が引きずられていくのが見えただけだった。

…海中…

「ガボツ…ゴボボツ…」

「カカカカカカ…」

洗介を海中に引き込んだのは人並みの大きさをしたイカ…クラークンだった。

「…ツツツ（変身）!?!」

このままでは呼吸困難で溺死してしまうのが分かり切っていた洗介はすかさずにヴァローノフォーム・オブ・フルに変身。なんとか酸欠でのデッドエンドだけは避けた。

「ティン…ヴァーレ!?!」

ヴァローはティンヴァールで足に絡みついている触手を切り落とし、体を自由にした。

「さて…こいつは厄介なことになったな……」

ヴァローは完ぺきに相手のテリトリーに入り込んでの戦闘となった。それでも、ヴァローは敵に対してその輝く赤い複眼を向けて戦闘態勢に入った……。

c
b e c o n t i n u e f o r t h e n e x t m a g i t o

M a g i c 3 W h i c h y o u r c h o i c e ? (後書き)

感想待ってます。以下、用語です。

マシンマジッカー

ヴァロー専用マシン。科学と魔法のハイブリットマシンで陸海問わずに使用できる。見た目は初代仮面ライダーのサイクロンや仮面ライダーWのマシンハードボイルダーのようなタイプ。見た目はサイクロンに近いがカラーリングはシルバーと黒。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5051y/>

仮面ライダーヴァロー ~ ~ ~ the magician rider ~ ~ ~

2011年12月20日00時46分発行